

【講演会報告】

狩猟採集民の人類学—人類にとって狩猟とは何か？

池谷和信氏講演会

(2006年度第1回 日本文化人類学会北海道地区研究懇談会・北海道民族学会 共催講演会)

桑山敬己

開催日：2006年10月1日

開催場所：北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟 W309 教室

講師：池谷和信氏 (国立民族学博物館助教授)

共催：北海道大学大学院文学研究科

2006年10月1日、池谷和信氏を講師に迎えて、標記講演会を北海道大学で行なった。例年通り、この講演会は北海道民族学会と日本文化人類学会(北海道地区)の共催で、池谷氏は前日に開かれた北海道大学大学院文学研究科公開シンポジウム「北方的：北方研究の構築と展開」のコメンテーターも務められた。今回の講演会はその協賛行事「北方文化講演会」を兼ねるかたちで行われた。以下レジメに沿って紹介する。

1 はじめに

1981年以来、池谷氏は4半世紀にわたって、世界各地の狩猟採集民を研究してきた。主な調査地は日本(マタギ)、アフリカ(サン)、ベーリング海(ロシアのチュクチ)、アマゾン(ワオラニ)、タイ(ムラブリ)、マダガスカル(ミケア)で、地球の北と南の両方でフィールドワークを重ねてきた点に特徴がある。池谷氏によれば、狩猟採集民研究には「アフリカ至上主義」とでもいう傾向があり、それはアフリカが人類の発祥地だという事実に由来する。だが、北と南では生態学的条件がまったく違い、それに伴って狩猟技術も大幅に異なるので、両者を比較してはじめて各々の特徴が理解できるのだという。

2 研究の国際的動向

1966年4月、アメリカのシカゴ大学で、狩猟採集民に関する国際シンポジウムが開かれた。日本から参加した渡辺仁は、アイヌの生業と生態系について発表した。この会議の記録は、後に*Man the Hunter* (1968) という書物にまとめられ、《狩猟採集民=原始未開人》という従来のイメージを覆したことで知られる。特に、サーリンズ(Sahlins, M.)が提示した「原始豊潤社会(original affluent society)」という考えは、一見過酷な生活を強いられている人々の「豊かさ」を示唆して注目を浴びた。一般に、このシンポジウムは狩猟採集民の研究を180度転換したと評されるが、池谷氏によれば議論の力点は南にあり、北はあまり考慮されなかった。しかし今日、狩猟採集民の研究は地域的にもテーマ的にも多様化し、国立民族学博物館は世界的な研究拠点になったという。それを裏付けるように、2000年以降、*Senri Ethnological Studies* が狩猟採集について矢継ぎ早に刊行され、扱われたテーマも資源管理、アイデンティティ、ジェンダー、エスニシティ、自己および他者イメージなど、多岐に渡っている。

3 世界の狩猟採集民の歴史

池谷氏は次のように問題を設定した。(1) 先史：狩猟採集民は技術的にどの地域でどのくら

い適応できたのか。(2) 古代から近世：狩猟と地域経済（たとえば毛皮交易）は両立できたのか、また帝国や王国のなかで狩猟採集民は存在できたのか。(3) 近現代：狩猟採集民は商品経済や国民国家とどのような関係にあるのか。

そのうえで、池谷氏は今日の狩猟採集民の様態について触れ、アマゾン流域にはいまだに未接触の部族がいること、フィリピンやタイや中央アフリカでは近隣の農耕民と共生関係にあること（ただし婚姻関係にはない）、カナダやオーストラリアでは政府の保護下で生活していること、またエコツーリズムの普及によって世界的に観光産業との関係が深くなったこと、などを指摘した。最後の点で興味深いのは、一部の狩猟採集民は観光客の到来を業者から携帯電話で知らされ、そのときだけ期待されているイメージを演出するという事実である。また、カラハリ砂漠のサン族については、弓矢を扱えない人が狩猟採集民として外部に表象されているという。

4 世界の狩猟文化の多様性

池谷氏は多様性に富む狩猟を「南の狩猟」と「北の狩猟」に大別した。前者に属するアマゾン流域では、未接触の部族が生存のための狩り（生業狩猟）をしているようだが、アフリカでは生業狩猟に加えて商業狩猟が営まれており、東南アジアでは焼畑農民がイノシシや野鶏を獲っている。対照的に、極北（北方地域）ではクジラやセイウチなどの海獣狩猟が営まれている。今日、クジラの捕獲は国際的に制限されているが、ソヴィエト時代のチュクチのように、海洋資源を自国の政府が管理している場合もある。南北の比較で注目になるのは、男の狩りによる肉が食事の総カロリーに占める割合は、南では 30 パーセント程度にすぎないのに、北では 80 パーセントにも達するという点である。

5 世界の狩猟文化の普遍性

狩猟は地球上のあらゆる自然環境に適応した技術だが、自然環境は場所によって非常に異なるので一般化はしづらい。また、これまで狩猟採集社会に普遍的と考えられてきた肉の配分における平等性も、商品経済の導入によって変化しつつある。

6 まとめ

シンポジウム「北方的」との絡みで、池谷氏は狩猟採集民研究に見られる「アフリカ至上主義」に警鐘を鳴らす一方、「南方的」なものも考慮しなければ「北方的」なものは理解できないと強調した。また、狩猟採集民研究は学際化しつつあり、考古学者はもちろん、最近では歴史家も植民地主義との関連で研究を進めていると指摘した。おそらく、狩猟採集民の社会変化でもっとも劇的なことは、国際政治の舞台における先住民運動との関わりであろう。池谷氏によれば、カラハリでは一部の狩猟採集民が自集団を代表して NGO と交渉するなど、エリート層が形成されて内部分裂状態にあるという。こうした社会変化は、目前でパイプラインが建設されるなかで起きており、研究者は現実を見据えたくて対象にコミットする必要がある、というのが池谷氏の結語であった。

（くわやま・たかみ／北海道大学）



池谷和信氏